

宗密禪師の禪教一致論に就て (二)

安 藤 義 鑑

三

斯の如くして宗密は荷澤の禪と澄觀の教とを打つて一團となし、融合して彼の思想内容を作り上げたのである。荷澤の眞空無念や澄觀の一心と云ふものから彼は萬法の大本を以て眞心と云ふた。彼の著「原人論」に説いてゐる所を見るに、『始めには唯一の眞靈性のみがあるが凡夫は迷うて之を隠す。故に眞妄が和合して阿頼耶識となる。此の識に覺不覺の二義があり、不覺に依るが故に念を生じ妄に自他心境の差別を執す。是に於いてか業を作り生を受く。心境共に一念不覺の妄動より生ず。不覺を遠離すれば本覺現前、一眞靈性のみなり。』と説いて居る。「華嚴經普賢行願品疏」には此の眞心を以て總該萬有心として居る。而して「圓覺經大疏鈔」卷一の上には、

唯心之言。深淺有異。若法相宗。言唯心者心但是有爲心識緣慮積集了辨別境爲相。卽此上來云一切唯識是也。若法性宗云唯心者。眞是真如之心。無爲無相。離諸緣慮分別亦唯一心。

と云ふて居るが、其の次に「起信論」を引用して、

故起信論云。心眞如者。卽是一法界大總相體云云。乃至離言說名字相。離心緣相。畢竟平等無有變易不可破壞。唯是一心。故名眞如。

とあるが、此の一心と云ふのは色々と分別し妄想し、慮知覺察するところの心では無いのである。森羅萬象一切有形無形の大源となるのである。「禪源諸詮集都序」卷一には之を、

此眞性、非唯是禪門之源。亦是萬法之源。故名法性。亦是衆生迷悟之源。故名如來藏藏識。亦是諸佛萬德之源。故名佛性。亦是菩薩萬行之源。故名心地。萬行不出六波羅密。禪但是六中之一當其第五位。豈可都目眞性爲禪行哉。

と云ひ又、

夫一心者萬法之總也。分而爲戒定慧。開而爲六度。散而爲萬行。萬行未嘗非一心。一心未嘗違萬行。禪者六度之一耳。何能總諸法哉。且如來以法眼付迦葉不以法行。故自心而證者爲法。隨行而起者爲行。行未必嘗同也。然則一心者萬法之所生而不屬於萬法。得之者則於法自在矣。見之則於教無礙矣。本非法不可以法說。本非教不可以教傳。豈可以軌迹而尋哉。(續藏經第一輯第二編第三套第四册)

と縦説横説して、眞心は卽ち一心は萬法の源を成すものであると云うて居るが、此の萬法の源たる一心眞心より見る時は、禪さへも單に六波羅密の一であり、六度の一であり、而もその第五位にあ

ると斷定するところが實に眞心を以て禪の上にあるものとして、此の高き眞心(眞性)の立場より禪を批判し、又以て佛教を判釋し、遂に禪教一致論を産み出すに至つたのである。

又斯く宗密の云ふところは序論に於て述べた如く、清涼大師が起信論を以て華嚴宗を論ずる根據とした事がやがて禪教一致の論據となつたと同じく、宗密の云ふのも亦起信論から來て居るのであつて、即ち起信論に、「一心からすべてが生ずる」と云ふところを以て右の論を出すに至つたのであつて、清涼の流れを吸んで居るのである。而して又彼の眞心は絶對心であり無念である。恰も鏡の萬象を照す様なものであつて心にして心ではない、況んや境ではない。有にして有ではない、況んや空無ではない、有無を離れて心境を亡するものであると云ふのであつて、此の眞心の無念であるところが清涼大師の云ふ「靈昭不昧」である。彼は此の處を「圓覺經大疏鈔」に、

故清涼大師云。靈知不昧。性相寂然……此經云。圓覺普照。寂滅無二。瓔珞經說。等覺照寂。妙覺寂照。金光明經。攝大乘論說。佛果無別色聲功德。唯如如。及如智。獨存。荷澤曰。即體而自知。即知而體自寂。名說難差。體用一致。實謂用而常寂。寂而常用。知之、一字衆妙之門。恒沙佛法因此成立。

と云ふて居る。又

此心非有無二邊。故非外。二邊既遣。中道亦亡。故非中。非中非邊。是絶待靈心也。

右の様に、眞心は無念であり絶對心であると云ふ信念に於て、彼の思想内容は確立されたのである。

上來述べた如く、彼の禪教一致論は彼の中心思想たる眞心(一心)なるものが産み出されたものであつたのであるから、序論に於て述べたる様な關係を外的原因ともすれば、此處に述べたるものは内的原因とも云ふべきである。

以下禪源諸詮集に就て彼の禪教一致論をみやう。

四

宗密は禪を六波羅密の一にして居ることは前に申したが、しかしその禪定はすべての根本となるものとして彼は、

然禪定一行最爲神妙。能發起性上無漏智慧一切妙用。萬德萬行乃至神通光明皆從定發。

と云ふ。それ故に皆禪を修せねばならない。

故三乘學人。欲求聖道必須修禪。離此無門。離此無路。至於念佛求生淨土。亦須修十六觀禪及念佛三昧般舟三昧也。

此處に於て我々が佛教全體を眺め考察するに、禪と云ふものゝ上に立つて之を觀れば、皆禪もしくは禪宗で無いものは無いのであつて、波羅門教に於てさへ禪の禪定を修するが、小乘教に於ける

四諦十二因縁より天台の一心三觀、華嚴の法界觀に至るまで、一つも禪に依らぬものは無いのである。その實際的方面を考察すれば、何れも皆唯一つの修行の方法たる禪定に依つてゐるのであつて、唯その禪の解釋内容が違ふだけであつて、禪と云ふ形式を持つて居ることは明らかである。それで眞心たる眞性は別に不垢不淨とか凡とか聖とか云ふものは無いのであるけれども、それが禪となる、其處に淺深が出来て来る。故に禪を修するに於て自ら差が出来る。即ち上下が出来る。此の禪を宗密は五つに分けて次の様に説いて居る。

眞性則不垢不凡聖無差。禪則有淺有深。階級殊等請帶異計。欣上厭下而修者是外道禪。正信因果亦以欣厭而修者。是凡夫禪。悟我空偏眞之理而修者。是小乘禪。悟我法二空所顯眞理而修者。是大乘禪。若頓悟身心本來清淨元無煩惱。無漏智性本自具足。此心即佛。畢竟無異。依此修者是最上乘禪。亦名如來清淨禪。亦名一行三昧。亦名眞如三昧。此是一切三昧根本。若能念念修習自然漸得百千三昧。達磨門下。展相傳者。是此禪。達磨未到。古來諸家所解皆是前四禪。八定。諸高僧修之皆得功用。天台南嶽合依三諦之理三止三觀。教義雖最圓明。然其趣入門口次第。亦只是前之諸禪行相。唯達磨所傳者頓同佛體迥異諸門。

と説いて、禪を外道・凡夫・小乘・大乘・最上乘の五種に區別し之を總じて云へば、教に頓漸のある如く、禪にも頓漸の二門あると説いてゐるのである。

前にも述べた様に六祖以後、禪と云ふもの、解釋が段々と深くなつて來たので其處に頓門漸門の區別が出來て來たのであるが、それが爲に教宗の様に禪にも自ら派別なるものが出來て來た。然し禪の派別は教宗の様な派別では無い。其の趣を異にして居るのであつて、禪は理窟や議論に互るものではないから理窟が合は無い、議論が違ふから別派獨立したと云ふ様な派別は無いのである。只その禪を發揮するに就いて、温和な人と峻烈な人と云ふ風にその人格に依つて出來たもので、所謂禪風の相違と云ふものが禪の派別を生じた。故に禪の派別と申しても教宗の様に教理的區別に依つては判然と分けられない。宗密は之を次の如く説いて、

宗義別者猶將十室。謂江西・荷澤・北宗・南僞・牛頭・石頭・保唐・宣什・稠那・天臺等立宗傳法。互相乖阻。有以空爲本。有以知爲源。有云行坐皆是。有云見今朝著分別爲作一切皆妄。有云分別爲作一切皆眞。有萬行悉存。有兼佛亦混。有放任其心。有拘束其心。有以經律爲所依。有以經律爲障道。

と云ふて、禪に十家の派別を立て、居る。又同じく彼の「圓覺經疏」にも、北宗禪(神秀の系統)、智儔の禪(懷讓の系統)、牛頭の禪(法融の系統)、南山念佛禪(五祖下に分る)、荷澤の禪(神會の系統)、の七種を擧げ又彼の「拾遺門」にも牛頭宗、北宗、南宗、荷澤宗、洪州宗の五宗を擧げて居る。

斯の如く各種の禪を彼は擧げて居るが、之をその本源より見れば皆眞性であるからその派別は無

くなるのである。而も眞性を離れてその禪體は無いのである。之を彼の禪の解釋より見ると、禪是天竺之語。具云禪那。此云思惟修。亦云靜慮。皆定慧之通稱也。源者是一切衆生本覺眞性。亦名佛性。亦名心地。悟之名慧。修之名定。定慧通稱爲禪。此性卽是禪之本源。故云禪源。

と云ふのであつて、禪源に於ては各種の禪皆同一である。此處に於て廣く申せば佛の説ける教の頓教漸教、禪の頓門漸門の二教二門各相符契し全く同じとなるのである。前に述べたる如く此の眞性は禪の源のみならず萬法の源であるからである。

佛は此の眞性（眞心）を源として、機に依つて法を説いたのであつて修道を問ふものがあれば則ち無修を以て答へ、解脱を求むる者あれば即ち汝を縛する者無しと答へ、成佛の道を問ふ者があればもと凡夫無しと云ひ、臨終の安心を問ふ者あれば本來無事と云ふ様に答へて臨機の説法をされたのである。それ故に其處に定まれるもの、即ち固定した阿耨菩提と云ふものは無いのである。只要は執着無き事を要するのである。彼に依れば、

要而言但是隨當時事應當時機。何有定法名阿耨菩提。豈有定行名摩訶般若。
と云ふのである。故に、

但得情無所念。意無所爲。心無所生。慧無所住。卽眞信眞解眞修眞證也。若不了自心。但

執名教欲求佛道者。豈不見識字看經元不證悟。銷文釋疏唯熾貪瞋耶。

である。然し自心を了し所念無く所爲無く所住無きに於ては、言々句句皆是真性真心であつて頓漸權實皆佛意にそむかないのである。

須判一藏經大小乘權實教理了義不了義。方可印定。諸宗禪門各有旨趣。不乖佛意也。

それ故に、只良く經論の權實を知つて諸禪の是非を辨じ、又禪心の性相を識つて經論の理事を知る
ことが必要である。それが爲に彼は十の所以を舉げて、

- 一 師有本未憑本印未故
- 二 禪有諸宗互相違阻故
- 三 經如繩墨楷定邪正故
- 四 經有權實須依了義故
- 五 量有三種勘契須同故
- 六 疑有多般須具通決故
- 七 法義不同善須辨識故
- 八 心通性相名同義別故
- 九 悟修頓漸言似違反故

十 師授方便須識藥病故

を説いて之等の所以を知ることにて、一藏經論は總べて三種の教と三種の禪となり相符合するのである。即ち

謂一藏經論。統唯三種禪門。言教唯三宗。配對相符方成圓成。

と云うて、禪と教とが此處に一致するのであると論じて居る。彼の擧げる禪の三宗とは、一、息妄修身宗、二、泯絕無寄宗、三、直顯心性宗、教の三宗とは、一、密意依性說相教、二、密意破相顯性教、三、顯示真心卽性教、である。

五

禪の三宗に就いて見るに、

一、「息妄修身宗」とは、衆生はもと佛性があるけれども無始より無明が之を覆ふ故に見る事が出来ぬ。故に生死に輪廻して見性了たる事が出来ない。故に須く師の言教に依て、境を泯じ心を觀じ念々を息滅して、念盡即覺で知らざる所無きとすべく、鏡の昏塵の如く須らくつとめて拂拭すべきである。故に此の宗に於ては禪境に入るために、

遠離慣聞。住閑靜處。調身調息。跏趺冥默。舌柱上齶。心注一境。

が如くして、念々を止息し妄塵盡くれば即ち佛性の寶鑑明かであるとするのである。彼は之に屬す

るものを北漸の諸師、牛頭、天臺等の方便門であるとして居る。

二、『泯絶無寄宗』とは、凡聖等の法は皆夢幻の如くである。一切諸法は本來空寂にして生死涅槃昨夢の如くである。平等真如法界は佛無く衆生無く法界も亦假名心である。故に修不修無く佛不佛なし。凡そ所作あることが皆是迷妄である。右の如く了達すれば本來無事であつて、心寄る所無く顛倒を免れて始めて此處に解脫云ふことが出来ること云ふのである。此の宗に屬するものは石頭、牛頭及び徑山の諸師である。

三、『直顯心性宗』とは、一切諸法若しくは有、若しくは空、皆唯眞性と説くのであつて従つて之に二種類がある。

(一) 云即今語言動作貪瞋慈忍造作善惡受苦樂等。即汝佛性。即此本來是佛。除此無別佛也。了此天真自然故。不可起心修道……。不斷不修任運自在方名解脫。

であり、時に隨ひ處に隨つて業を息し神を養ひ、聖胎增長顯發自然神妙なるを眞悟眞修眞證とするものである。

(二) 云諸法如夢諸聖同說故妄念本寂。塵境本空。空寂之心。靈知不昧。即是空寂之知。是汝眞性。

と云て知の一字衆妙の門にして無始より以來之に迷ひ、妄りに身心を執して我と爲し、貪瞋等の念

を起して善友の開宗を得ば頓に空寂の知を悟り、而も知且無念無形。誰爲我相人相。覺諸相空。心自無念。念起卽覺。覺之卽無修行。妙門唯在此也。雖備修萬行唯以無念爲宗。斯くすることに於て愛惡は自然に澹薄、悲智は自然に増明し罪業は自然に斷除し功行は自然に増進する。以上の如くして既に諸相非相を了すれば自然に無修の修である。煩惱盡くる時生死は絶する寂照は現前し應用は無窮である。之を佛と名づくるを此の宗とするのである。

以上の(一)、(二)の二つが此の宗の直顯心性宗にはあるが而も此の(一)、(二)の二つは皆相を會して性に歸するが故に同一宗である。荷澤等の禪は之に屬する。

宗密は右の如くして禪の三宗を説いてゐるが之を考察するに、つまり第一は心の垢を去つて本來の光明を發せしむべしと云ふので、第二は迷と云ひ悟と云ふも共に妄念であるから此の妄念を去るべしと云ふ。これ亦妄念として飽くまでも空に重きを置く手段を執るもの。第三は自然任運の所作に任せて萬有自ら妄念分別を超脱し、柳綠花紅底そのまゝにして無爲の爲、無作の作に契ふ妙用があると云ふのであつて、宗密は暗に自分の荷澤宗は此の第三にあるものだと説いてゐるのである。それ故に第一は迷悟に執して迷を去り、悟を得ると云ふやり方であるから有的禪宗で、第二は迷悟を悉く拂ふもので空的禪宗で、第三は中道的禪宗と云ふべきである。此の三宗を分てる後の宗密の言葉を見るに、

然上三宗中。復有違教慢教隨相毀相拒外難之門戶。接外象之善功。教弟子之儀軌種々不同。皆是二利行門各隨其便。亦無所失。但所宗之理即不合有二。故須約佛知會。

と云ふて居る。

次に教の三宗に就いて見るに、

一、「密意依性說相教」とは、此の中に三種類ある。

(一)、「人天因果教」で人間が天上に生るべき善惡因果を説くのであつて、

說善惡業報。令知因果不差。懼三涂苦。求人天樂。修施戒定一切善行。得生人道天道乃至色無色界。

ものであるから人天因果教と云ふ。

(二)、「斷惑滅苦樂教」であつて三界の生死は惑により業を作るから惑を斷じて永く三界を出でなければならぬと説くのである。即ち我と云ふものは因縁和合であり元來一體無く我人相に似て我人で無い。故に

修無我觀智。以斷貪瞋等。止息諸業。證我空真如。得須陀洹果。乃至滅盡患累。得阿羅漢果。灰身滅智永離諸苦。

と云ふのである。阿含等六百一十八卷經、毗婆沙等六百九十八卷論皆此の小乘及び前の人天因果を

説いて部帙多しと雖も理は之を出でないのである。

(三) 「將識破境教」で八種の識の中に於て第八識は根本であつて七識を生じ能く自分の所縁を變現する。此の八識の外都て實法は無い我身相及び外の世界は皆唯識の所變であつて、迷ふ故に我及び諸境がありと執するのであるが、既に本我法無く只心識あるを悟れば遂に此の二空の智に依つて漸々に煩惱所知の二障を伏斷する、唯識觀及び六度四攝等の行を修するからである。二空所顯の眞知を證し十地圓滿して八識轉じて四智菩提を成するのであり、法性身大涅槃を成するのである。即ち阿頼耶識は一切諸法の根本であつて、識の外にはすべて實法は無い。三界は唯識で我無く法無し。此の唯識觀に依つて諸障を斷じ以て菩提を證するのであると説くのである。それで解深密等の數十本の經、瑜伽唯識の數百卷の論説の理は此れを出でないのである。何となれば我法二執の妄念を止めて唯識の心を修するものであるからである。それ故に達磨は壁觀を以て人に教へて諸縁を止め内心喘無く身墻壁の如く、心死灰の如く以て遂に入るべしと云ひ、廬山遠公と佛陀耶舍との二梵僧の譯せる達磨禪經の中にも坐禪の門戸漸次の方便と、天臺及旣秀門下の意趣と異なる無しと明らかにして居る。故に四祖は數十年中脇席に至らなかつたのであつて息妄修心の行をなしたのである。

二、『密意破相顯性教』とは、唯識教では外境を空とし内識を有とするけれども心は孤起すること無くして心に由つて現するのであつて、心如なることは境に即して謝し、境滅することは心に即して

空するのである。故に無境の心は無く無心の境は無いのである。

皆以假託衆緣無自性。故未曾有一法。不從因緣生。是故一切法無不是空者。

故に空中眼耳鼻舌身意無く十八界十二因緣四諦無く、得無く業無く報無く修無く證無し。既に斯の如く空で無いものは無く、一切諸法は皆是虚妄である。執すべき無く着すべき無し是を道行となすのである。諸部般若千餘卷經及び中百門等の三論及廣百論等皆此れを説くのである。それ故に此の教は禪門の第二の泯絶無寄宗と全く同じである。

龍樹提婆等の菩薩は此の破相教に依りて廣く空義を説いたのであつて其の執着を破し洞然を眞空に解せしめたのである。

三、『顯示眞心卽性教』とは、此の教は一切衆生は皆空寂の眞心があり、無始本來自性清淨であると説くのであつて、明々不昧、了了常知、盡未來際まで常住不滅である。故に名づけて佛性と無し亦如來藏と名づけ心地と名づけるのである。釋尊は法界の一切衆生を觀じて、

奇哉奇哉。此諸衆生云。何具有如來智慧。愚癡迷惑不知不見。我當教以聖道令其永離妄想執着。自於身中得見如來廣大智慧。與佛無異。

と云はれたのである。華嚴經出現品に

無一切衆生而不具有如來智慧。但以妄想執着而不證得。若離妄想。一切智自然智無礙卽得。

現前。

とある。此處に知と云ふは、證知では無く、眞性である。緣境分別の識の如くでは無く、昭體了達の知の如きでは無く、眞に眞如の性、自然の常知である。馬鳴菩薩の云ふ自體眞實識知である。又寶藏論にも

知有有壞。知無無敗。其知之知。有無不計。

とある。即ち有無を計らないのであるから、自性無分別知である。以上の如く靈知之心を開示するのであるから、即ち眞性と佛と異ならないのであるから、之を顯示眞心卽性教と云ふのである。之に屬するものは華嚴密嚴圓覺佛頂勝鬘如來藏法華涅槃等の四十餘部の經、寶性佛性起信十地法界涅槃等の五十部の論であつて、或は頓或は漸と云ふて同じからずと雖も、所顯の法體皆此の教に屬するに據るからである。故に此の教は禪門の第三の眞顯心性宗に全く同じである。

此の教なるが故に達磨は善巧文を揀り、心を傳へ、其の名を標擧して黙して、其の體を示したのであつて、喩へば壁觀を以て諸緣を絶せしめ、諸緣を絶する時斷滅否を問ふものあれば、「諸念を絶すと雖も亦斷滅せず」と答へ、然らば何を以て證驗不斷滅と云ふやと問ふ者あれば、「了了自知で言及ぶべからず」と答へたのである。即ち師は印して只此れ此の自性清淨更に疑ふ勿れと云ふたのである。それで親しく其の體を證して然る後に之を印して餘疑を絶せしめて、默傳心印を爲したのである。

即ち袈裟を以て信と爲したのである。

右の如くして宗密禪師は教の三宗を説いて各々前述の禪の三宗と合致することを説明して懇切叮嚀餘す處が無いが、此處に於て尙ほ一切佛教を考へるに、昏沈厚重にして策發し難きもの、掉舉猛利にして抑伏すべからざるもの、貪瞋熾盛にして境に觸れ制し難き者に對しては、則ち前の第一第二の教中の種々の方便を用ひて病に隨つて調伏したのであり、若し煩惱微薄に慧解明利なる者には則ち第三の一行三昧に依つて教化したのである。彼は「起信論」を引いて

若修止者住於靜處。端身正意不依氣息形色。乃至唯心無外境界。

と云ひ、又「金剛三昧經」を引いて禪即是動不動不禪は無坐禪と云ひ、又「法句經」を引いて

若學諸三昧是動非坐禪。心隨境界流。云何名爲定。淨名云。不起滅定現諸威儀。不於三界現身意。是爲宴坐。佛所印可。據此則已達三界空花四生夢寢。依體起行修而無修。尙不住佛住心。誰論上界下界。

とあるがしかし此の教中に於ては、一眞心性を以て染淨の諸法に對して全く揀ひ全く收むるのである。彼は此の全揀全收をば説明して全揀とは

如上所説。但尅體直指靈知。即是心性餘皆虛妄。故云非識所能識。亦非心境界等。乃至非性非相。非佛非衆生。離四句絕百非。

全收とは

染淨諸法無不是心。心迷故妄起惑業。乃至四生六道雜穢國土。心悟故從體起用。四智六度乃至四辨十力妙身淨刹。無所不現。既是心想起諸法。故法法全即真心。如人夢所現事事皆人。如金作器器器皆金。如鏡現影影影皆鏡。

である。それ故に「華嚴經」には

知一切法。即心自性成就慧身。不由他悟。

とあり。「起信論」には

三界虛儀唯心所作。離心則無六塵境界。乃至一切分別。即分別自心。心不見心。無相可得。故一切法如鏡中像。

とあり、又「楞伽經」には

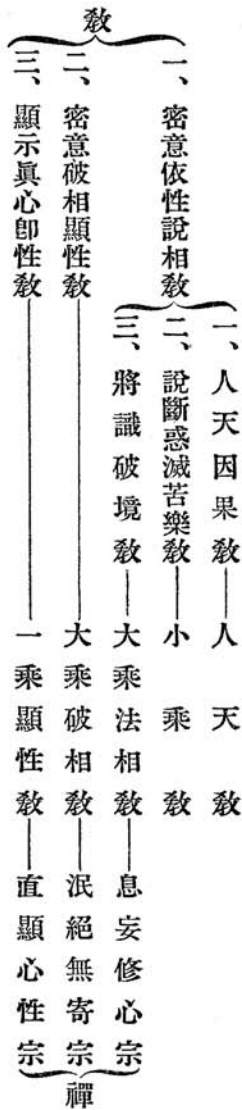
寂滅者名一心。一心者名如來藏。能遍興起一切趣生。造善造惡受苦樂與因。但故知一切無非心。

とあるのであると彼は云ふて、その終りに

全揀門攝前第二破相教。全收門攝前第一說相教。將前望此。此則迥異於前將此攝前。前則全同於此深必該淺。淺不至深深者直顯出真心之體。方於中揀一切。收一切也。如是收揀自

在性相無礙。方能於一切法。悉無所住。唯此名爲了義。
と云ふて居る。

翻つて彼の説ける三教に就いて考察するに、第一は有的教宗であり、第二は空的教宗である。而して第三は中道の教宗と云ふべきであつて、教の三宗は各々禪の三宗に全く同じとなるのである。宗密禪師は尙はその著「原人論」に佛敎を概括して人天敎、小乘敎、大乘法相敎、大乘破相敎、一乘顯性敎の五種としてゐるから、以上述べたる彼の三教三宗を之と共に當てはめて圖示すれば次の如くなる。



六

右に於て宗密禪師の教の三宗禪の三宗を觀察してそれが各々相符會し一致することを明らかにしたが、尙彼はその中に於ける空宗性宗の陰顯を説いてゐるからそれを見て、彼の此の三教三宗に對

する結論を観ることとする。彼は次の如く空宗性宗を述べて居る。

上之三教。攝盡佛一代時所說之經及諸菩薩所造論。細尋法義。使見三義全殊一法無別。就三義中。第一第二空有相對。第三第一性相對。皆昭然易見。唯第二第三破相與顯性相對。講者禪者同迷皆謂同是一宗一致。皆以破相便爲眞性。故廣辨空宗性宗。有十種異。

としてその十種の異とは

- 一、法義眞俗異
 - 二、心性二名異
 - 三、性字二體異
 - 四、眞智眞知異
 - 五、我法有無異
 - 六、遮詮表詮異
 - 七、認名認體異
 - 八、二諦三諦異
 - 九、三性空有異
 - 十、佛德空有異
- であつて簡單に空性宗を見るに、空宗は諸法の本源を名づけて性とし、性宗は之を心とする。性宗所說の本性は空寂のみならず自然に知るものである。次に空宗は諸法の無性を性とするも性宗は靈明不空の體を性とする。次に空宗は分別を知とし無分別を智とする、知は淺く智は深しとするも、性宗は能く聖理を證する妙慧を智とし理智を該ねて凡聖に通するを知となし、知は通し智は局るとする。又空宗は有我を妄とし無我を眞とするも、性宗は無我を妄とし有我を眞とする。次に空宗は多く遮詮を用ひて非有非空不生不滅といふも、性宗は遮詮表詮を用ひ靈鑑光明昭惺惺等と云ふのである。

斯くして彼は空宗性宗を明白に分けて居るけれども、此處に三教三宗一致以來明したる宗密禪師

の結論を見るに

雖分教相亦勿滯情。三教三宗是一味法。故須先約三種佛教。證三宗禪心。然後禪教雙忘。心佛俱寂。俱寂則念念皆佛。無一念而非佛心。雙忘則句句皆禪。無一句而非禪教。如此則自然聞泯絕無寄之說。如是破我執情。聞息忘修心之言。知是斷我習氣。執情破而眞性顯。則泯絕是顯性之宗。習氣盡而佛道成。則修心是成佛之行。頓漸空有既無所乖。洪荷秀能豈不相契。若能如是通達。則爲他人說無非妙方。聞他人說無非妙藥。藥之與病只在執之與通。故先德云。執則字瘡疣。通則文妙藥。通者了三宗並不相違也。

と云ふて三教三宗の歸結を明らかにして居る。之に依りて見れば即ち三教三宗は一味の法であり。雙忘するに至り絶對執着無く通することを最も必要とするのである。此處に於て始めて三教三宗並んで在つて相違しないのである。彼が雙忘、無執着と云ひ、通すると云ふは即ち彼の中心思想たる萬本の本源たる絶對直心に歸入するところにあることは、上來述べ來つたところに於て明白なことである。結局此の眞心一心にあるのである。

尙ほ此處に此の歸結の中に「頓漸空有所乖」と云へる。頓漸と云ふのは、禪の頓漸、教の頓漸とを指すは云ふまでも無いが、禪の頓漸は前に述べた如くである。此處に教の頓漸を見るに頓漸は禪に頓漸ある如く教にも頓漸あるので頓教漸教と云ふ。之に世尊の説法は不同であつて稱理頓説あり、

隨機漸説がある。故に之を頓教漸教と名づけるのである。漸は中下根以下の者の爲めに説いたのである。頓には遂機の頓と化儀の頓とがある。又漸修頓悟、頓修漸悟、漸修漸悟がある。しかしかくの如く頓漸と云ふものはあるけれども頓漸は機に在るのである。而も頓漸は三教の外には無い。彼の言に依れば、「非三教外别有頓漸。」同時に禪の頓漸なるものも、此の教の頓漸と同じく、三宗の外に在るのでは無い。教に三教三宗の中に頓漸は有る。

それ故に彼の結論を透して是等の頓漸や教の中の所詮の法、又その總括たる三教三宗なるものもど何れより來り何處に至るかを見、又仰いで佛の此の教を説ける本意は何の事の爲めにありしかを考察するに、彼は世尊の一眞の心體より流出したるものとして次の如く云ふて居る。

推窮教法從何來者。本從世尊一眞心體流出展轉。至於當時人之耳。

と云ふて而も此の一眞心は一切衆生の心中にあると説いて、

今時人之目其所説義。亦只是凡聖所依。一眞心體隨緣流出展轉。遍一切處。遍一切衆生身心之中。但各於自心靜念如理思惟。卽如是如是而顯現。

と云ひ、之を知れば大藏經の始終本末は一時に洞然として明了になつて來るのである。又一方考へれば佛の説ける經の本意は世尊が衆生をして佛智見を開き、その道に入らしむる一大事因縁の爲めに世に出現して説かれたのであつて、諸法を演説されたけれども、それは皆一佛乘として居るので

ある。故に菩提樹下に於て正覺を成じた。即ち衆生は皆智慧徳相を具有して居るにかゝわらず思想執着に依り證得しないのであるから、世尊は之を明示されたのである。之を以て彼は

便請將佛此自述本意。判前三種教宗。豈得言權實一般。豈得言始終二法。禪宗例教誰謂不然。切欲和會良由此也。

と云ふて居る。然れども禪は世尊の大覺に於ける眞心に在り、教は此の眞心の體より流出せるものである。而も此の眞心は誰もが具有して居るのである。只之を證得することに於て眞心は眞心たり得るのであり禪教は全く一致和會されるのである。

結 論

之を要するに宗密禪師の自身の結論に於て明らかなる様に、三教三宗は結局一味であり、而も雙忘し無執着のところに至りて通ずるに於て禪教一致があるのであつて、つまりその根本となつて居るのは彼の中心思想である所の萬法の根源たる絶對眞心である。そして彼の眞心は結局「起信論」の一心と同じであつて、彼の禪教一致論の根本となつて居るのがやはり此の「起信論」である。起信論の立義分に

是心則攝一切世間出世間法。

依於此心顯示摩訶衍。

と云ふて居るところより來て居るのである。此の心と云ふのは、一心であり衆生心であるから、即ち衆生心を本として大乘教は一心から生ずると云ふところを宗密禪師は取つて來て、禪の目的とするところも此の一心(真心)を顯はすにあり、教の目的も一心を顯はす所にあるから兩者は同一でなければならぬと云ふ所にあるのである。此處は即ち清涼大師の流れを汲める所である。

又他方より彼の禪教一致論を考察すれば、禪に於ける真心は教に於ける無始本有の自性清淨なりとしてその大圓融を説けるものであり、又教に云ふ吾人の心性は本來出纏如來の法相を具し、修道の功を待たずして本來成佛なりとするところは、禪の本來成佛と同じであるから之を攝して法界緣起に入らしめたものである。

かくして彼が真心を力説し、禪を批判し教を判釋して、組織と理路と整然たる禪教一致論を成じたるは彼の偉大なる功績である。(完了)